

た な か み 山

第 9 号 行 具
桐 生 民 具
ク ラ ブ

治山治水 千年のつけ

天井川とのたたかい (下の三)

山本文良

◎緊急事態発生

「災害は、忘れた頃やって来る。」
という諺がありますが、禿山をもつ
田上周辺の里はそんな悠長なことは
言っておられません。

雨が降り出すと、人々は心配顔で
空を仰ぎます。ラジオがまだ普及し
ていなかった戦前は言うに及ばず、
戦時中でも若者は戦場に駆り出され
老人・女・子供は大変だったのです。
禿山は、特に台風や集中豪雨・長

雨になると、河川は見ている間に増
水してきます。

そんな時になると、昼夜の別なく
各村の区長及び村役人・消防の方々
は、仕事を投げ出して直ちに警戒に
当たったのです。

先程まできれいで静かだった河川
が急に泥水と化し波立ち、大小のゴ
ミや木が非常な勢いで流れ出します。
天は、人々の不安を無視するかのよ
うに雨は一層激しく降りつけます。

増水に次ぐ増水。遂に危険水域に達
すると、村々の火の見の半鐘や鉦が
鳴らされます。

村人は総出で、糞・笠・地下足袋
に身を固めて鍬やスコップを片手に
堤防へ急ぎます。

土のう(砂俵・砂袋)作り。運搬。
杭打ち。橋板はずし。流木の取り除
き。立木の伐採と流しづくり。婦人
会の炊き出し……。こうしたことは
得手して夜間が多く、雨と暗やみの
中懐中電灯を頼りに行われる作業は、
全く危険極まりないものがあります。

最悪の場合は、橋は流され、堤防
は決壊。道路は寸断。田んぼは土砂
で埋まり、家まで水に漬かるという
ことが起こります。

「戦いすんで日が暮れて……」と
かつての軍歌にうたわれていたよう
に、災害の翌日は晴天になることが
多く、安堵で胸を撫でおろすのも束
の間。今度は、田んぼの見廻り・土
手の補修が待っていて農家では休む
暇はありません。

◎護岸工事のいろいろ
水は、あらゆる生物にとって一日
も欠かすことのできない大切なもの
です。しかし、一度荒れ狂うとおそ
ろしい悪魔となってしまう。

禿山に降った雨は、忽ち山や谷の
土砂を削り泥流となって里を襲いま

す。このため、出水毎に川底は浅く
なり、氾濫のおそれが生じてきます。
そこで、人々は川底を掘り下げ、
土砂を両岸に盛り上げて堤防を高く
丈夫にしてみました。

鍬やジョレン・鋤に皿籠やモッコ
に捧しかなかった明治の初め頃まで
の掘り起こしと運搬。労力の割には
能率は殆どあがらなかった作業。本
当に想像を絶するものがあつたと思
われます。

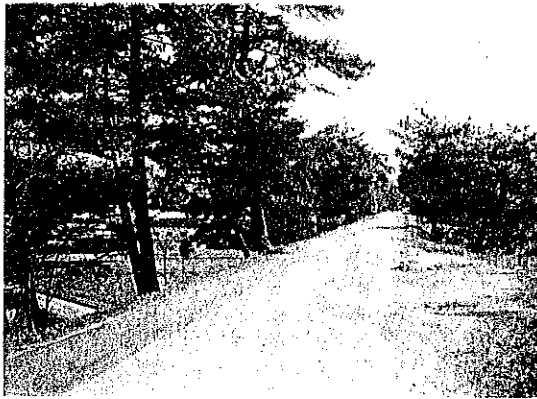
いやこれだけではありません。い
くら両岸に堤防を築いても、元を正
せば土砂ばかりです。大水が襲って
きたらひとたまりもありません。

このため、堤防のノリシロに竹や
松・芝生を植えたり、水際に杭を打
ちこんで決壊を防いできました。

萱尾川の大改修(昭和六十二年起)
でなくなりましたが、中野町側の竹
藪。桐生町の中を流れる草津川に残
る堤防の松並木。今は、二世三世以
上でしょうが、あれも昔の人達の生
活の知恵であり、誇りだったのです。

土砂が中心の堤防の両側に松を植
え、根を張らせて堤防を丈夫にした
り、いざと言う時には、松を根本か
ら伐り倒して川岸に一方を固定し流
れにそわして決壊を防いだのです。

話は少し変わりますが、松の大き
の幹をよく見ると、鋸の目のような



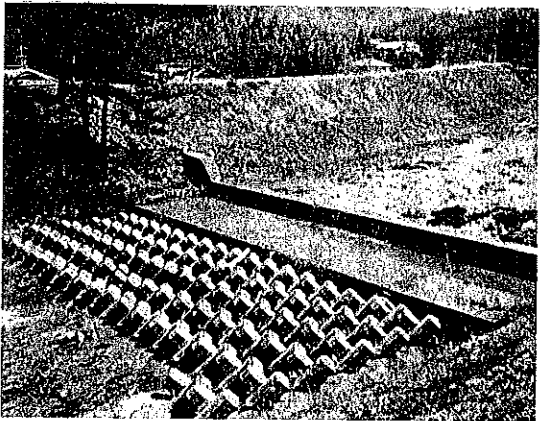
草津川堤防の松並木 (桐生町)



草津川堤防の蛇籠 (桐生町)



萱尾川のシガラ (平野町)



草津川の堰堤

筋が何本も斜めについているのに気づくことがあります。あれは、第二次世界大戦の傷跡なのです。当時の日本は、戦争中なので輸出入は全くできなく、油の備蓄も日に日に少なくなり四苦八苦だったのです。

そこで思いついたのが松から油をとることだったのです。つまり「松根油」です。これを飛行機の潤滑油として使ったのです。こんな所にも戦争の悲劇がかくされています。

川のふちの所どころに今も「蛇籠」が残っています。あれも護岸工事の一つで、川と直角に堤防のノリシロに並べて土砂の流出を防いだのです。

これは簡単に言うと、後には竹製の籠から鉄線の籠に変わりましたが、横約四十五cm・長さ五mのも

ので、中へ中ぐらいの石を一杯つめます。見た感じは、まるで大蛇(錦蛇)を入れる籠か、大蛇のような籠です。そんなところから「蛇籠」と名前が付けられたのだらうと思えます。

二宮金次郎さんと言えば「チョン マゲ・着物・草鞋履き・背中に柴を負い歩きながら本を読んでいる子供の石像」や「柴刈り縄ぬい草鞋を作り……」の歌を思い出される方があ

るでしょう。「勤剣力行」と「孝行」を自ら説き実行された後の尊徳先生です。

終戦(昭和二十年)までの教科書や絵本に出て、必ずといってよい程川普請で働いておられるお姿がありました。その中に、この蛇籠が描か

れています。すると江戸時代の末期には、既に使われていたのです。川が中型以下になると、田んぼや島の土手が崩れた(ヌケソ)時の応急処置や補強用に今もされる(シガラ)のように、丸太杭(直径約十五cm・長さ約二m五十cm)を水際に約一m五十cm間隔に並べて半分ぐらい打ち込んで行きます。そこへ、八番線を約十五cm間隔で横に張り付け、それに杉皮を当て土砂を入れます。

更に「イノコツチ」を挿木して長持ちや補強用にした護岸工事も行われ

てきました。しかし、これは余り長持ちしないので、後には針金や杉皮は厚くて長い松板に変わり、更に現代のように鉄の矢板になりました。

このシガラの例は、「インガクチ」を過ぎて平野町の民家に差しかかる辺りの萱尾川の水際に見られます。このシガラ作りの「杭打ち機」の

仕掛けや仕事は、ちよつと面白いものがあります。まず、二本の電柱のような丸太を立てその間に重りをつけます。この重りは、綱をつけて上げ下げができるようにしてあり、更にそれを両方に五く六本ずつに分けています。勿論、重りの下には丸太杭を立てます。この杭打ち機を堤防の水際に立て

梶を取る人の合図にあわせて、両岸から五く六人ずつが「エンヤコラ、マイター」と掛け声をかけて綱を引きます。すると重りはスルスルと上がります。頂点まで届くと綱をゆるめます。重りは、勢いよく下がって杭を打ちます。この時「ドッスン」と音がします。「エンヤコラ、マイター」「ドッスン」の繰り返しです。見ていると、とても面白く又のどかな作業風景でした。

この他、土手や堤防を作った時の「芝張り」や「石垣・ブロック積み」は、よくご存知の通りです。

こうしてみると、水防の歴史や先人のご苦労を偲ぶと胸をうたれます。機械化された今日でも、藤原・奈良時代の大濫伐の後遺症は千二百余年も尚続いているのです。

今、地球上では「豊かさ」のかけにかかれて工場や自動車の煤煙や排気ガスによる大気汚染と地球の温暖化。酸性雨による森林の枯死。原生林の大濫伐。戦争による環境破壊が進み、大問題が起つています。

「おごる平家久しからず」の例えのように、人類はやがて滅んで行くかも知れません。

「つけ」は「公害」は、絶体残さないこれは鉄則です。子々孫々の為にも。

(完)

新宮神社の創建

新免町元宮総代 西村 喜八・山崎 勲

◎氏神様のはじまり

新宮神社の創建は、栗太鵜志や滋賀県神社誌、そして近江輿地誌略にも「不詳」となっていますが、「米満」が「新免」と改名された保延三年(一一三七年)に坂本日吉神社二の宮十禪師権現社を分祀したのが初まりではなかったかと思われま

先の棟札をよく見ると、新宮大明神の方は「奉造立……」十禪師権現の方は「奉修造……」と書かれています。つまり、新宮大明神の御神殿は初めて造られたのであり、十禪師権現の御神殿は補修・修繕されたもので以前から建てられていたと考えられます。

とならび、二段目には、
牧村 平野村 中野村 芝原村 新免村 志摩村
と書かれ、三段目には、
牧庄惣氏子中
最後の四段目には、
東郷氏 中野氏 古市氏 山本氏
と記されています。

……新宮大明神(三尊寺) 十禪師権現(三尊寺) 薬師如来(三尊寺) 石玉垣(三尊寺) 井而(三尊寺) 鳥居(木造) 石灯笼(三本) 金灯笼(一対)……
とあり、次に、
右境内御年貢地御座候 堅六十四間 横廿三間……
と記されています。

奉造立新宮大明神御神殿

大工藤原五郎三郎家次

時天文歳次己亥年三月敬白

別の棟札には、

奉修造十禪師権現御神殿

だから、新宮大明神は天文八年(一五三九年)に祀られ、社名もおそらく「十禪師権現社」から「新宮神社」に改められたものと推測されます。

江戸時代の終わりまでは、今の上田上学区の殆どは「田上郷牧庄」に属し、牧庄は、牧・平野・中野・芝原・新免・桐生の六ヶ村から編成されてい

明治以前(一八六七年以前) 野上神社(灯笼)が勧請される。大神宮(灯笼)が勧請される。明治九年(一八七六年) 村社に列せられる。

それは、米満の時代にはお宮さん

荒戸神社は後に変わりますが、この六ヶ村の総社だったので、だから一口に言えば、米満時代のお宮さん

大正年間(一九一二〜一九二六年) 稲荷大明神が勧請される。大正十二年(一九二五年) 大鳥居を木製から石造に変える。

はな

それを解決するヒントになるものが、荒戸神社(中野)の寛永八年(一六三一年)の棟札にありました。

昭和十年頃(一九三五年頃) 社務所が新築される。昭和十一年(一九三六年) 「新宮神社」の石造標柱が建立される。

き

新宮大明神をお祀りするようにな

昭和五十一年(一九七六年) 御輿渡幸・獅子頭等が復活される。

ま

の初舞いが行われています。

つ

さら

ま

さら

ま

さら

ま

さら

ま

さら

ま

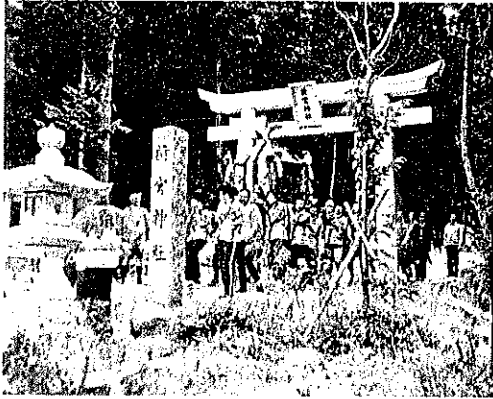
さら

ま

さら

ま

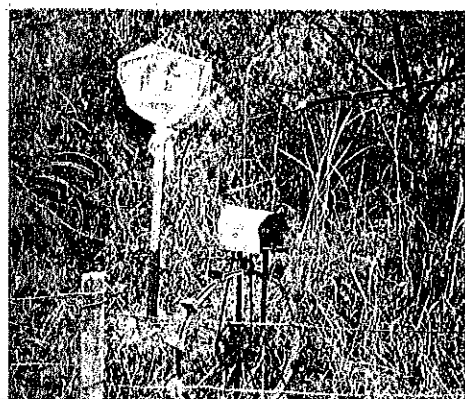
さら



新宮神社のおまつり

大明神

古文書によると、



水力発電式鹿おどし (桐生町)

◎追記

滋賀県神社誌によると、お一人の神様でも幾つかのお名前をもっておられます。また、お祀りの仕方によっても神社名が変わっています。それを新宮神社のご祭神に当ててみますと、次のようになります。

新宮神社……速玉男命＝新宮大明神
十禪師権現社または十禪師権現
……(夫)大山昨命＝十禪師権現
(妃)玉依姫命
日吉神社……大山昨命
樹下神社……玉依姫命

第八号三ページ四段六く七行目
新宮大明神は「新免町の産土神即ちご先祖」は速玉男命の誤り。
同十二く十三行目
「新宮大明神のご先祖に感謝し」は削除。
以上訂正して深くお詫申し上げます。

文にすればたったこれだけのものですが、物が全然ない時代に廃品を利用した手作りです。
当時としては、かなり効果があがりすばらしい新兵器だったようです。世が世であれば、創意工夫発明展でおそらく農林大臣賞でしょう。全く頭が下がります。

廃物利用

水力発電式鹿おどし

ふれあい村資料館 山本 三郎

山間部で水稲や他の野菜等を栽培している者は、毎年のように憎い猪との戦いがあります。

どうしたら、この猪の害を未然に防ぐかが大問題で、先祖代々苦勞の連続で全く人間と猪の知恵比べ根くらべです。

今日は、第二次世界大戦の敗戦(昭和二十年)から立ちあがった日本の農家の青年。その方は、地元桐生町のYさんが工夫発明した「水力発電式鹿おどし」をご紹介します。

とができたなら、猪は感電して来なくなるに違いない。何とかならないかと明け暮れ……
遂に、その日がやって来たのです。今は、私の「ふれあい村資料館」で保管し、見学者があると実演して御覧にいられています。廃物を利用しては実によく考えられたものだといつも感心させられています。

それは写真のように自転車のリムに、昔使われた脱穀機についている昇降機受皿を固定させて別の発動機のマグネット(磁石)を取り付けます。運動を起こすために自転車のチェーンを利用したものです。
山水を引いて落とすと、受皿に水が入るのでリムは回転します。チェーンによってマグネットは連結されているために発電します。

死で、一粒でも多く米を作らなければならなかったのです。
稲に穂が出るころから、猪は必ずやってきます。ですから猪などに食べられてたまるか、山の田を血眼になり家族が毎晩交代で番をしたのです。

農機具も破損はしても新品はおろか修理もろくにできない日々だったのです。
山水を利用した音だけの「鹿おどし」ではどうにもなりません。針金を張り巡らしても役に立ちません。若し、もし電気を起こして流すこ

この電気を裸の銅線につないで田んぼや島の周りに張り巡らすと電気が流れ、それに猪が触れると「ビリッ」と感電するという仕掛けです。
おれ
ご投稿・ご指導・資料ご提供・取材ご協力本当にありがとうございます。心からお礼申し上げます。
桐生民具クラブ代表 山本文良
電話☎〇〇七七 有線五六七八

上田上の道(2)

山本文良

牧町の一角を流れる大戸川の綾井橋を渡ってまっすぐ約百メートル進むと道が直角に二つに分れます。そこに道しるべ(五七cm×一六×一一)が建っています。
〇右ふとうみち
と陰刻されています。
いつの時代に誰が建てたかわかりませんが、おそらく「太神山不動尊」の深い信仰者だろうと思います。
道は程なく山にさしかかり、ここからは雑木のトンネルが続きます。